

**報告タイトル**

カンボジア銀行業の資本構成とプルデンシャル政策への含意  
**Capital Structure of Cambodian Banking Industry  
and Its Implications for Prudential Policy**

**氏名(所属)**

奥田 英信(帝京大学)  
馬 香伊(帝京大学大学院)

**要旨(800字程度)**

自由化された市場において、リスクに適切に対応した銀行経営を行うためには、適切な資本構成を実現することが重要である。Okuda 他(2021)は、コロナ禍以前の時期を対象として、カンボジア商業銀行の資本構成決定要因を検討し、同国の銀行が適切な経営判断を行っているのかを検証した初めての試みであった。

カンボジアの銀行を取り巻く経済・経営環境は、コロナ禍の発生により大きく変化した。コロナ禍以前の銀行経営は、好調なマクロ経済環境を背景に、銀行自身の自主的・主体的な決定に基づいて行われていた。一方、コロナ禍以後のカンボジアでは、中央銀行の指示により、大規模なローンリストラクチャリング(貸出債権回収の弾力化)が実施されると同時に、将来の不良債権の増加に備えて、銀行資本金の積み増しが進んだ。銀行経営に対する中央銀行の影響力が強まる中で、銀行の資本構成の決定要因も変化しつつあると思われる。

本稿は、コロナ禍以前とコロナ禍以後で、カンボジアの銀行の資本構成決定要因に変化が生じたか否かを、Okuda 他(2021)を利用して、回帰分析を行った。具体的には、データベースをコロナ禍の期間を含む 2022 年まで拡張し、バランスパネルデータの利用可能な主要商業銀行 12 行のデータを利用して資本総資産比率の決定要因の回帰分析を行った。

推計結果によれば、コロナ禍前の 2019 年までは、Okuda 他(2021)と同様に、(1)カンボジア商業銀行の資本構成は企業金融理論によって合理的に説明できるが、(2)積極的な経営拡大を目指す銀行は経営リスクを軽視している傾向が見られた。一方、コロナ禍発生後には、(3)銀行経営において経営リスクへの配慮が強まり、銀行の資本構成も経済合理性により合致したものに変化しつつある。ただし、(4)この変化は急激であり、銀行の自発的・自主的な行動変化というより、銀行経営に対する中央銀行の指導の結果である可能性が強い。この事例は、途上国の銀行経営においては、監督当局の積極的な指導が必要であることを改めて示すものと言えよう。